

天草版平家物語卷第四第八章段小考

——依拠本をみる——

市井外喜子

一 はじめに

天草版平家物語（1592年、イエズス会天草学林から出版され、原ローマ字本は、大英博物館蔵。）の口訳者不干ハビヤンは、序（読誦の人に対して書す）の一節に、次のように記している。

この物語を力の及ぶところわ本書のことばを違えず書写し、抜書となしたるものなり。

この一節を手がかりとすれば、天草版平家物語は、古典平家（原拠本）を忠実に口訳していることになる。また口訳に際しても、序の一節に、次のようにある。

（わが師）いまこの平家をば書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如く、ことばのてにはを書写せよとなり。

とあるように、天草版平家物語は、聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と、話し手の喜一検校（QI.）の兩人によって、平家物語の大略を、当時の話し言葉で語るものである。

天草版平家卷第四第八章段（大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと）は、国会本では、第87句梶原二度の駆 第88句鶴越に相当する。高野本では、卷第九 二度之懸 坂落 越中前司最期に相当する。

今回は、第八章段前半の「大手生田の森の合戦のこと」、国会本では第87句梶原二度の駆相当部分を対比しながら、天草版平家の依拠本をみてゆきたい。なお第87句は、河原太郎・次郎の兄弟と、梶原父子の先陣争いが語られているが、梶原父子の奮戦については省筆が多くみられるので、対比部分は河原太郎・次郎兄弟による奮戦場面とする。

第八章段は、次のように語りはじめられる。

VM. して生田の森の方にわなんとあったぞ？

Q1. 大手生田の森にわ範頼その勢五万余騎で卯の刻の矢合わせと定められたれば、まだ寄せられなんだ。

この両者の語りが始まる以前の源平の様子を、国会本によって簡潔に示しておく。

(寿永三年) 正月中旬ごろ 平家は讃岐の屋島より摂津の国難波潟へぞ伝はり給ふ。東は生田の森を大手の木戸口とさだめ、西は一の谷を城郭とぞかまへける。(第84句六箇度のいくさ)

2月4日 源氏は、一の谷へ寄すべかりしが、「故太政入道の忌日」と聞いて、仏事をおこなはせんがためにその日は寄せず。(平家も、大手、搦手二手に分けてつかはさる。)

5日 西ふさがり。

6日 道虚日。

(6日のあけぼの、九郎義経一万余騎を二手に分けて、土肥の次郎を大将として、七千余騎をば一の谷の西の手へさし向けらる。)

7日 卯の刻に摂津の国の一の谷にて、源平矢合せとぞ定めける。七日の卯の刻に、大手、搦手の軍兵二手に分かつ。(源氏、「七日の卯の刻矢合せ」と定めたりければ、かしこに陣をとり、馬やすめ、ここに陣とり、馬を飼ひなんどしていそがず。平家はこれを知らずして、「いまや寄す」「いまや寄す」とやすき心もなかりけり。)(第85句三草山)

さらに第88句鶴越は、(2月) 7日源氏、大手ばかりにては勝負あるべしとも見えざりければ、七日の卯の刻に、九郎義経、三千余騎にて一の谷のうしろ、鶴越にうちあがって、(略)

とあるような状況における VM. して生田の森の方にわなんとあったぞ? と誘いかける場面描写を中心にして、天草版平家物語の依拠本を観察し、報告することとする。

天草版平家と対比する古典平家(国会本・京都本・斯道文庫本・小城本・龍大本・高野本・葉子十行本・流布本: 8本)として使用した『平家物語』は、次のものである。

- 1 国会本(百二十句本)新潮日本古典集成『平家物語』新潮社
- 2 京都本(百二十句本)『平家物語百二十句本』思文閣
- 3 斯道文庫本(百二十句本)『百二十句本平家物語』汲古書院
- 4 小城本『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院

- 5 龍大本（覚一本）日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 6 高野本（覚一本）新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 7 葉子十行本 日本古典全書『平家物語』朝日新聞社
- 8 流布本『平家物語』おうふう

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著 明治書院）を使用する。

二 天草版・国会本・高野本の対照比較

天草版平家卷第四第八章段における依拠本をみるに際して、8本の古典平家から代表比較例文を示すのは、国会本（百二十句本系の代表として）・高野本（覚一本系の代表として）とする。また、代表的な比較例文から、対比特徴をみると、4パターンに整理することができる。

分類パターンを示す。

A 高野本のみが、天草版・国会本と異なる場合

- 1 天草版＝国会本∥高野本（当該箇所は存するが、表現形式が異なる場合）

○・○∥△

- 2 天草版＝国会本∥高野本（当該箇所が欠如している場合）○・○∥レ

- 3 天草版＝国会本∥高野本（当該箇所が高野本のみの場合）レ・レ∥○

B 天草版のみが、独自性を持つ場合

- 4 天草版∥国会本＝高野本（天草版が古典平家と対立する場合）○∥レ・レ

これら4パターンにみられるそれぞれの特徴を以下に記す。

(1) パターン1（○・○∥△）

まず最初は、天草版＝国会本∥高野本（当該箇所は存するが、表現形式が異なる場合）を、みることにする。例文記述順は、天草版・国会本・高野本となる。

このパターンに属する最初のもは、各々の章段冒頭にみられる。

- (1)・大手生田の森には Noriyori その勢五万余騎で卯の刻の矢合わせと定められたれば、まだ寄せられなんだ。その手に武蔵の国の住人河原太郎、河原次郎と言うて、vototoi あったが、(天)

・大手生田の森には蒲の冠者範頼、その勢五万余騎。「卯の刻の矢合わせ」と定めければ、いまだ寄せず。その手に、武蔵の国の住人、河原の太郎、河原の次郎とて兄弟あり。(国)

・さるほどに、成田五郎も出きたり。土肥次郎まっさきかけ、其勢七千余騎、色々の旗さしあげ、おめきさけンで攻めたゝかふ。大手、生田の森にも、源氏五万余騎でかためたりけるが、其勢のなかに、武蔵国住人河原太郎・河原

次郎といふものあり。(高)

高野本では二度之懸冒頭部に、国会本第86句熊谷・平山一二の懸の末尾部分が来ている。この点が、天草版と国会本が同じ冒頭部を有するのとは、異なっている。これは、百二十句本系の他の3本、また覚一本系の他の3本においても、同じ傾向がみられる。天草版と同じものを○、当該箇所はあるものの、表現形式が異なるものを△で示し、表として記す。

卷第四第八	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	小 城 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本
(1) 冒 頭	○	○	○	○	○	△	△	△	△

(2)・(河原太郎→次郎) いかにか次郎殿、卯の刻の矢合せと定まったれども、あまりに待つが心もとなう覚ゆるぞ：敵を目の前に置きながら、なにを期しようぞ？弓矢とる法わかうわなものを：身が鎌倉殿のを前で討死つかまつらうと申したことがある：さあれば城のうちを入ってみようと思う：わ殿わ生きて証人にたて(天)

・(河原太郎→次郎)「いかにか次郎殿、卯の刻の矢合せと定まったれども、あまりに待つが心もとなうおぼゆるぞ。敵を目の前におきながら、いつを期すべきぞや。弓矢取る法は、かうはなきものを、高直鎌倉殿の御前にて、『討死つかまつらんずる』と申したることがあるぞ。されば城のうちを入りて見ばやと思ふなり。わ殿生きて、証人に立て」(国)

・(河原太郎→次郎)「大名は、我と手をおろさねども、家人の高名をもって名誉す。われらは、みづから手をおろさずはかなひがたし。かたきをまへにをきながら、矢ひとつだにも射ずしてまちるたるが、あまりにこゝろもとなう覚ゆるに、高直は、まづ城の内へまぎれ入って、ひと矢射んと思ふなり。されば千万が一もいきてかへらん事ありがたし。わ殿は残りともまて、後の証人に立て」(高)

古典2本ともに、東国武士の目ざす功名＝先陣を述べているが、2本の違いは明白である。2系統に属する他の諸本も、同傾向を持っている。(1)に習い、表を示しておく。

	天	国	京	斯	小	龍	高	葉	流
(2)兄→弟	○	○	○	○	○	△	△	△	△

(3)・(次郎→兄) くちをしいことを宣うものかな！ ただ vototoi あらうずるものが、兄を討たせて証拠に立たうと申さうずるに、弓矢とる法によいと申

さうずるか？ それがしもとても討死しようずるに、同じゅうわ一所でこそいかにもならうずれ (天)

・(次郎→兄)「口惜しきことをのたまふものかな。ただ兄弟^{おとどい}あらんずるものが、『兄を討たせて証拠に立たん』と申さんずるに、弓矢取る法に『よし』と言ひ候ひなんや、守直とても討死せんずるに、同じくは一所にてこそいかにもならん」(国)

・(次郎→兄)「口惜い事をものたまふ物かな。たゞ兄弟二人ある物が、あにを討たせて、おとゝが一人残りともまったらば、いく程の栄花をかたもつべき。所々で討たれんよりも、ひとところこそそいかにもならめ」(高)

	天	国	京	斯	小	龍	高	葉	流
(3)弟→兄	○	○	○	○	○	△	△	△	△

このパターンを示すものは、他にも見られるが、前半部分における箇所を示してみた。

(2) パターン2 (○・○||レ)

パターン1に続き、パターン2天草版=国会本||高野本(当該箇所が欠如している場合)をみることにする。

(4)・(河原太郎→下人ども) 故郷にとどめ置く妻子のもとえこの様どもを言ひつかわし、馬どもをば汝らにとらす：生あるものなれば、命のあらうほどわ形見にせいと言うて、馬にも乗らず、下人をもつれず、ただ二人下々をはき、逆茂木を乗り越えて、城の内に入ったれども、(天)

・(河原太郎→下人ども) 故郷にとどめおく妻子のもとへこの様ども言ひつかはし、「馬ども、なんぢらに取らす。生あるものなれば、命あらんほどは形見とすべし」とて、馬にも乗らず、下人も具せずして、ただ二人芥芥をはき、逆茂木乗り越えて、城のうちにぞ入りたりける。(国)

・下人どもよびよせ、最後のありさま、妻子のもとへ言ひつかはし、馬にも乗らずげゞをはき、弓杖をついて、生田の森のさかも木をのぼり越え、城のうちへぞ入りたりける。(高)

(5)・河原 vototoi 立ち並うで、さしつめひきつめさんざんに射る：究竟の手たれなれば、矢ごろにまわるほどの者わはづるることわなかったところで、この者ども愛しすぎいた：今わ射取れ若い輩と言うたれば (天)

・河原兄弟、立ち並びて、さしつめ、引きつめ、散々に射る。究竟の手だれなりければ、矢ごろにまはるほどの者は外るることなし。「この者、愛しくし。今は射とれや、若党」とて、(国)

- ・是等おとゝい、究竟の弓の上手なれば、さしつめひきつめさんざんに射るあひだ、「にくし、討てや」と言う程こそありけれ、(高)
- (6)・河原太郎が左の脇を右の脇えつつと射出されて、弓杖にすがって立つところに、弟の次郎これを見て、敵に首を取らすまいと思うたか、つつとよって兄を肩に引掛け、逆茂木を乗り越ゆるを、(天)
 - ・河原太郎が左のわきを右のわきへ、づんど射通されて、弓杖にすがって立つところに、弟の次郎これを見て、「敵に首を取らせじ」とや思ひけん、つと寄つて兄を肩に引っかけ、逆茂木乗り越えけるを、(国)
 - ・河原太郎が鎧のむないたうしろへつと射抜かれて、弓杖にすがりすくむところを、おとゝの次郎はしりよって、是をかたにひっかけ、さかも木をのぼり越えんとしけるが、(高)

これら上記(4)・(5)・(6)のパターン2の例は、天草版平家が国会本に依拠しているところが明白である。河原太郎・次郎兄弟の言動描写が具体的である。表に示し、パターン2の例をまとめておく。

	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	小 城 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本
(4)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ
(5)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ
(6)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ

(3) パターン3 (レ・レ||○)

パターン3は、パターン1および2とは異なり、高野本のみ当該箇所がみられるものである。同じ古典平家ではあるが、国会本には見られず、それに依拠する天草版にも、当該箇所は当然欠如している。パターン3の例を示す。

- (7)・(平家方) 東国のものほどすべて恐ろしいものわない：これほどの大勢の中にただ二人入ったらば、なにほどのことがあらうぞ？そのものどもをしばしをいて愛せよと申すところに、河原 vototoi 立ち並うで、(天)
 - ・「東国の者どもほど、すべて恐ろしかりけるものはなし。これほどの大勢の中に、ただ二人入りたらば、何ほどのことかあるべきぞ。その者ども、しばし置いて愛せよ」とぞ申しける。河原兄弟立ち並びて、(国)
 - ・「東国の武士ほどおそろしかりけるものはなし。是程の大勢の中へ、たゞ二人入ったらば、何ほどの事をかし出すべき。よしよし、しばしあひせよ」とて、討たんと言ふものなかりけり。是等おとゝい、(高)
- (8)・真名辺が郎等二人打物の鞘をはづいて、河原 vototoi が首をとっていった。

(天)

・真鍋が郎等二人、打物の鞘をはづいて出で、河原兄弟が首を取ってぞ入りにける。(国)

・真名辺が下人おちあふて、河原兄弟が頸をとる。是を新中納言の見参に入たりければ、「あッぱれ剛の者かな。これをこそ一人当千の兵とも言ふべけれ。あつたら者どもを、たすけてみで」とぞのたまひける。(高)

上記(7)・(8)は、高野本の描写力がみられるところである。パターン2の河原太郎・次郎兄弟についての言動描写とは異なり、パターン3は平家方の様子を具体的にみせるものである。表に示し、(7)・(8)の整理をしておく。

	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	小 城 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本
(7)	レ	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○
(8)	レ	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○

(4) パターン4 (○ || レ・レ)

このパターン4は、これまで述べてきたパターン1・2および3とは異なり、天草版平家にのみ見られるものである。天草版の独自性を示すものと言える。表を先に示す。

	天 草 版	国 会 本	京 都 本	斯 道 文 庫 本	小 城 本	龍 大 本	高 野 本	葉 子 十 行 本	流 布 本
(9) qemiō jitmiō	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
(10) mi	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ
(11) foregaxi	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ

以下に(9)・(10)・(11)の例文を示す。

(9)・河原太郎 vototoi 立ち並うで、qemiō jitmiō (仮名実名) を名のり、大手の先陣ぞと呼ばわれれば、(天)

・河原太郎兄弟、立ち並うで名のりけるは、「武蔵の国の住人、私の党、私市の高直、同じく次郎守直。源氏の手先の先陣ぞや」とぞ名のりける。(国)

・河原太郎、大音声をあげて、「武蔵国住人河原太郎私高直・同次郎盛直、源氏の手、生田の森の先陣ぞや」とぞ名のりたる。(高)

天草版において、国会本・高野本（古典平家）のような名のりをあげず、qemiō jitmiō（仮名実名）とするのは、次のような理由からである。

『天草版平家物語』の序（読誦の人に対して書す）の一節に、次のようにある。

この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称えあることをも避くべしとなり：ゆえ如何となれば、これものの理をみだすによって、他国のことばを学ばんとする初心の人のためにわ大きな防げなり。

因に(1)文の天草版は、Noriyori である。国会本では、蒲の冠者範頼となっている。天草版平家には、目次・タイトル・(1)文の、Noriyori を除けば、他に12例の Noriyori が見られる。国会本の当該箇所を表記を加え、天草版の意図を確認しておく。

- ① 225₁₄ 弟の Noriyori と、義経をさしのぼらせられたが、第80句義経
（鎌倉の兵衛佐の舎弟、蒲の冠者範頼）

熱田の陣

- ② 230₄ 生食を Noriyori 以下の人々参って申されたれども、第81句宇治川
（蒲の御曹司）

- ③ 233₁₄ 大手の大將軍にわ Noriyori、相徒う人々武田の太郎 第81句宇治川
（蒲の御曹司範頼）

- ④・⑤ 241_{5,6} 大きに驚いて Noriyori、義経二人の舎弟を参らせてござる。
（範頼）

兄にてござる Noriyori わ 第82句義経院参
（範頼）

- ⑥ 254₁₀ 大手の大將にわ Noriyori、相徒う人々わ武田の太郎 第85句三草山
（蒲の冠者範頼）

- ⑦ 286₁ Noriyori、義経らが申し状あながちに御許容あらうずることでない
（範頼）

と、第91句平家一門首渡さるる事

- ⑧ 325₂₂ 同じ十四日 Noriyori も平家追伐のために、七百余艘の船に乗って、
（三河守範頼）

第101句屋島

- ⑨ 341₂₂ 兄の Noriyori と一つになって、鎮西え渡らうと召され、第103句
（三河守）

讒言梶原

⑩・⑪ 378^{22・23} 舎弟 Noriyori を呼うで、御辺義経が討手の大将に上られい
(三河守)

とあったれば、Noriyori 辞し申されたところで、第116句堀川夜討
(三河守)

⑫ 379₃ Noriyori 大きに驚いて上らうずる由を申されたれども、第116句
(三河守)

堀川夜討

これら Noriyori の例から、天草版平家編纂の基準がつかぬかかれている様子
をみることができる。

(10)・mi が鎌倉殿のを前で討死つかまつらうずと申したことがある (天)

・高直鎌倉殿の御前にて、『討死つかまつらんずる』と申したることがある
ぞ。(国)

(11)・foregaxi もとても討死しようずるに、同じゅうわ一所でこそいかにもな
らうずれ (天)

・守直とても討死せんずるに、同じくは一所にてこそいかにもならん (国)

(10)・(11)両文は、自称詞の問題である。国会本のように(10)高直、(11)守直という固
有名詞ではなく、天草版では(10) mi、(11) foregaxi という人称詞(自称詞)が用い
られている。(10)は、河原太郎(兄)→次郎(弟)に対して用いる mi であり、(11)
は河原次郎(弟)→兄に対して用いる forigaxi である。なお高野本は該当箇所が
欠如しているために、直接対比はできない。

mi、foregaxi について天草版平家の出版年(1592)に近い、ロドリゲス『日
本大文典』(1604~1608、長崎)の記述をみておく。

・Vare Varera 又は Vareraga Vatacuxi Soregaxi これらは丁寧な形で
あって、尊敬し又謙遜して話すのに用いる。普通は男に用ゐられる。初の二
つは話しことばと書きことばに、次の二つは話しことばだけに使ふ。

・Mi 又は Miga Midomo Midomoga Midomoraga これらは何れも私
といふ意味で、男子がいくらか優越感を伴って言ふ場合に用ゐられる。特に
初の二つがさうである。何故なれば、その他のものは身分の低い者同志でも
用ゐるから。

(10) mi (兄→弟)、(11) foregaxi (弟→兄)は、ロドリゲス『日本大文典』にそ
くしたものと言える。

三 おわりに

本稿は天草版平家物語巻第四第八章段(大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴

越を落され、越中の前司が討死のこと)の前半部分=大手生田の森の合戦のことに注目し、古典平家(国会本・京都本・斯道文庫本・小城本:百二十句系統本、龍大本・高野本・葉子十行本・流布本:覚一系統本)と比較し、依拠本を探ろうとするものである。なお本稿において、具体例として比較文例を示したのは、国会本・高野本である。

対比特徴をみると、4パターンに分類整理できる。

- 1 天草版=国会本||高野本(当該箇所は有るものの・高野本のみが表現を異にする)
- 2 天草版=国会本||高野本(高野本のみが当該箇所を持たない)
- 3 天草版=国会本||高野本(当該箇所が高野本のみみられる)
- 4 天草版||国会本=高野本(天草版と古典平家に対立を示す)

この4パターンにしたがって、(1)文~(11)文までを表にまとめてみると、次のようになる。

卷第四第八		天草版	国会本	京都本	斯道文庫本	小城本	龍大本	高野本	葉子十行本	流布本	備考
パターン1	(1)	○	○	○	○	○	△	△	△	△	冒頭 兄→弟 弟→兄
	(2)	○	○	○	○	○	△	△	△	△	
	(3)	○	○	○	○	○	△	△	△	△	
パターン2	(4)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ	兄→下人
	(5)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ	
	(6)	○	○	○	○	○	レ	レ	レ	レ	
パターン3	(7)	レ	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○	
	(8)	レ	レ	レ	レ	レ	○	○	○	○	
パターン4	(9)	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	qemiō jitmiō mi foregaxi
	(10)	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	
	(11)	○	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	レ	

序にある ①この物語を力の及ぶところわ本書のことばを違えず書写し、抜書をなしたるものなり。 ②この物語をば書物の如くにせず、兩人相對して雑談をなすが如く、ことばのてにはを書写せよとなり。 ③この国の風俗として、一人にあまたの名、官位の称えあることをも避くべしとなり の編纂方針に沿い、天草版平家(卷第四第八章段前半部分)は、百二十句系統本を依拠本とすると言え

る。同時に、天草版平家独自の創意(9)と、あたらしさ(10)・(11)も、みられる。

付：引用例文中 Vototoi をローマ字書きにしたのは、次の理由からである。

本稿のような方法による依拠本推定の他に、Vototoi の語義（一昨日、年上と年下の二人の兄弟、二人の兄弟または姉妹）から、依拠本を探ることも可能であるためである。このことに関しては、『日本文学研究』第42号（平成15年2月）に、VOTOTOI ノートとして、報告している。

参考図書

天草版平家物語対照本文及び総索引 江口正弘 明治書院

平家物語 新潮日本古典集成 新潮社

平家物語百二十句本 思文閣

百二十句本平家物語 汲古書院

小城鍋島文庫本平家物語 汲古書院

平家物語 日本古典文学大系 岩波書店

平家物語 新日本古典文学大系 岩波書店

平家物語 日本古典全書 朝日新聞社

平家物語 おうふう

ロドリゲス日本大文典 土井忠生訳注 三省堂